

平成十九年十月十一日提出
質問第一〇七号

自衛隊補給艦「ときわ」から間接給油を受けた後の米空母「キティホーク」の行動に関する質
問主意書

提出者 江田 憲 司

自衛隊補給艦「ときわ」から間接給油を受けた後の米空母「キティホーク」の行動に関する質

問主意書

米国防総省や衆院予算委員会（二〇〇七年十月十日。以下「委員会」という。）での石破防衛大臣の答弁によれば、二〇〇三年二月二十五日に海自の「ときわ」から米補給艦ペコスに補給された燃料は八十万ガロンで、ペコスはその後六十七万五千ガロンをキティホークに給油したが、そのすべてが「ときわ」から補給された分だったと仮定しても、キティホークの当時の航行速度や作戦行動と照らし合わせると、三日間で消費し尽くす量だとした上で、キティホークはこの間、海上阻止活動のための監視などのOEF（不朽の自由作戦）に従事し、その後の同二十八日夜になって、ペルシャ湾北部で、イラク南部の飛行禁止区域を監視する「南方監視作戦（OSW）」の支援活動に入ったという。よって以下質問する。

- 一 米国防総省は、キティホークがペルシャ湾北部でイラク南部の飛行禁止区域を監視する「南方監視作戦（OSW）」の支援活動に入ったのは、二〇〇三年二月二十八日夜としているのか。念のため確認する。
- 二 キティホークの一日の燃料消費量について、米国防総省は「六十七万五千ガロンは三日間で消費し尽くす量」としているが、

① 米国会計検査院の資料では、キティホークのような通常型空母の一日の標準的燃料消費量が約十一・三万ガロン、キティホーク自身のホームページでは約十五万ガロンとされていることとの整合性如何。前者なら六日間分、後者でも四・五日間分となり、米国の言う「南方監視作戦（OSW）」の支援活動にかかる。重大な点なので、米国に問いただした結果も含め、国民に納得のいく説明をされたい。

② 石破防衛大臣はこの点、キティホークの一日の標準的燃料消費量が二十万ガロンと委員会で答弁しているが、米国会計検査院やキティホーク自身の数字との整合性も問う。

三 委員会での石破防衛大臣の答弁によれば、ペコスからの給油を受けた後のキティホークでは、ペルシヤ湾内で数回の飛行活動があった（ゆえに燃料消費量が増大した）という。これが正しいとすると、ホルムズ海峡をこえたペルシヤ湾上でのキティホークから発進した艦載機が、イラン上空を飛ばず、引き返す形で、あるいは迂回する形で、アフガン作戦に従事したと考えるのは極めて不自然ではないか。軍事的には「南方監視作戦（OSW）」の支援活動に入ったと考えるのが自然なところ、あくまでもOEFに従事したというなら、国民が納得できる整合性ある説明をされたい。

四 石破防衛大臣の答弁によれば、米国防総省は、当時、キティホークは三十三ノットの高速航行で、かつ

数回の飛行活動にも高速航行が必要であり、それで燃料消費量も上がった旨の説明をしているとのことだが、ホルムズ海峡は狭隘でタンカー等の艦船の往来が輻輳している中で、このような高速航行は不自然ではないか。また、空母艦載機は必ずしも高速航行でなくても発進できる。この点についての政府の見解如何。

五 仮に、三十三ノットの高速航行で通常より多く燃料消費が必要だったとしても、「ときわ」から間接給油された六十七万五千ガロンの油は、既にキティホークに存していた油と混ざっているのだから、その混ざった油のうち、間接給油分だけが三日間優先的に消費されたと考えるのは、まったく不自然で理屈に合わない。それでも三日間優先的に消費されたと主張するなら、キティホークの燃料消費メカニズムから、物理的・化学的に合理的な説明をされたい。

六 仮に、米国防総省が主張するように、二〇〇三年二月二十五日から三日間、キティホークがOEFに従事したなら、なぜ、キティホークの艦長が書いた年次報告書にその記述がないのか。同公文書には、この二〇〇三年二月二十五日を含む「一〇四日間連続 (continuous)」の、イラク自由作戦に従事する連合軍への支援」を行った旨の記述があるが、それと明らかに矛盾するのではないか。政府の見解如何。

七 二〇〇三年一月二十三日に横須賀港を出港したキティホークは、同二月六日「Ordered to Deploy」、すなわち、従事すべき任務の命令を受けている。あくまでもキティホークがOEFに従事したというなら、その命令書を米国から入手し国民に開示されたい。開示できないなら、その理由を述べよ。右質問する。